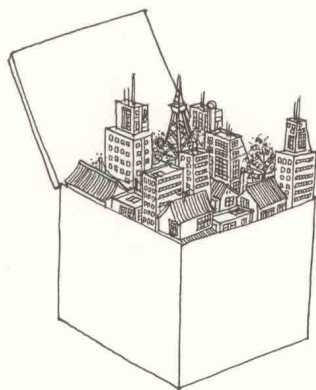


坂口恭平

Kyohei Sakaguchi

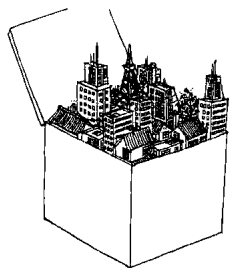


T
O
K
Y
O

一
坪
遺
産

T O K Y O H I T O T S U B O I S A N

口恭平



TOKYO 一坪遺産

H I T O T S U B O

春秋社

著者紹介

坂口恭平（さかぐち・きょうへい）

1978年、熊本県生まれ。2001年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。在学中から路上生活者の家に興味を持ち、「建築物」としての視点から調査・研究を始める。2004年、写真集『0円ハウス』（リトル・モア）を出版。その活動が認められ、2006年にカナダの「VANCOUVER ART GALLERY」で展覧会を開催。2007年にケニアで開かれた「World Social Forum Nairobi 2007」では作品展とワークショップを行った。国内での個展多数。著書に『TOKYO 0円ハウス 0円生活』（大和書房）、『隅田川のエジソン』（青山出版社）がある。

●ホームページ

<http://www.0yenhouse.com>

TOKYO 一坪遺産

2009年6月25日 初版第1刷発行

著者©＝坂口恭平

発行者＝神田 明

発行所＝株式会社春秋社

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6

電話 (03) 3255-9611（営業）

(03) 3255-9614（編集）

振替 00180-6-24861

<http://www.shunjusha.co.jp/>

印刷所＝信毎書籍印刷株式会社

製本所＝株式会社三水舎

装丁＝岩瀬 聡

装画・本文絵・写真＝坂口恭平

© 2009 Kyohei Sakaguchi

ISBN 978-4-393-33296-2 C0036

Printed in Japan

定価はカバー等に表示してあります

はじめに——頭のなかの無限大

小学生の頃、六畳一間の子供部屋には僕、弟、妹三人の机が並び、ピアノが置かれていた。それだけでもう満杯である。さらに三人がそこで遊ぶわけである。それはそれで楽しいのであるが、たまには一人でゆつくりしたいなんて時もある。しかし、他に行く場所はない。この六畳一間でどうにかするしかないのだ。好きなようにできる場所は愛用の学習机に限られている。

そこで僕は思いついた。

学習机しかないのなら、そこを一人でゆつくりできる空間に変化させればいい。

たとえ狭くても、視点を変えさえすれば自分だけの空間を手にすることが可能はずだ。

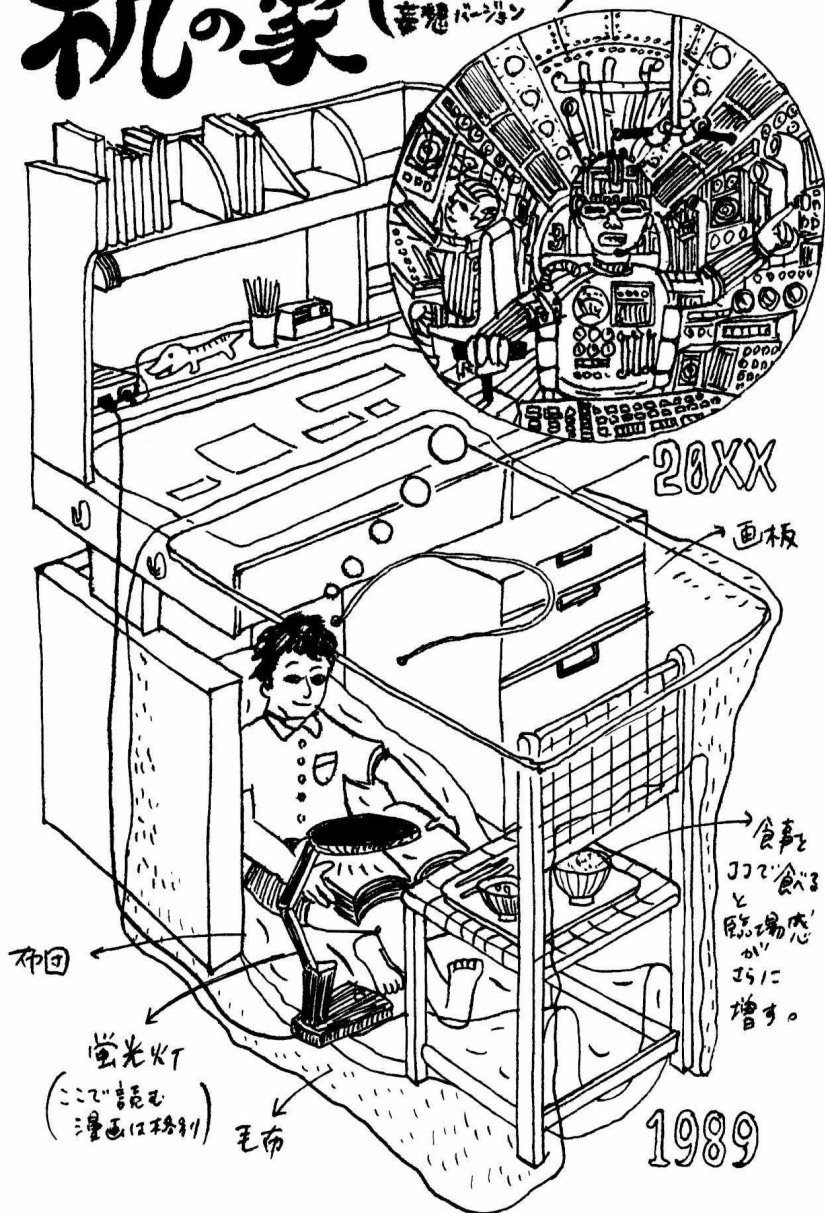
そう考えた僕は、図画工作の授業で使っていた写生用の画板を持って机と椅子の間に橋のように架けた。これが屋根になる。そして、押入れから毛布を取り出してきて画板の上から掛けた。いつの間にか学習机は、見事に洞窟のような空間に変身した。床に、布団を敷けば完成。僕はその中に潜り込み、蛍光灯スタンドを灯し、食事をし、さらに寝ることにした。まるでそこは潜水艦のコクピットのようなだった。

コクピットの回りには、自分に必要な機器、道具が揃っている。自分の体を空間に合わせていくのではなく、逆に、必要な要素全てを人間の近くに持ってきて、設置しているのだ。このやり方だと、どんなに小さく狭い場所であっても、人それぞれ独自の空間ができる。

それはとても衝撃的な体験であった。いつもは作業をしていた机の下に入り込んで、座するための椅子をテーブルのように使うだけで、非日常的な空間が手に入る。狭いと思っていた机の下は、そこに身を置くととても心地良い空間だった。さらに洞窟の隙間から、外を眺めると、そこがいつもの混沌とした子供部屋ではなく、まるでサバンナの荒野のように感じられたのだ。視点を変えると、まだまだ小さな部屋には可能性が残されていた。

これは大きな発見だった。欠如というものが新たな空間を生み出すのである。

机の家 (近未来コクピット 豪華バージョン)



子供の頃は、狭いからといって部屋を改築するわけにはいかない。お金も技術も無い。それ以前にそんな面倒臭い。時間をかけてそんな大工事をやっている暇は無いのだ。できるだけ何も手を施さずに、新しい世界を次々と作り出すにはどうしたらよいか。

「目の前の空間には実は無数の自分の知らない、気付いていない空間が隠されている。それを利用するしかない」

僕にはそれが唯一の方法に見えた。無いからといって、新しく自分の欲する物を作り上げたとしてもそれはまた新しく限られた空間が増えたということに過ぎないのである。もっと大きな空間を体験したいのならば、逆に何一つ作ることなく、見えない空間があるということを感じるこのほうが重要である。

この巢作りの体験はそれを僕に体感させてくれた。

そして、現在。街を歩くと、今日もまた新しい建物が作られている。どんどん巨大化、高層化し続け、もはや人間が作ったものとは思えないほどである。一体、どれだけの空間があれば人は満足するのか。足りることは永遠に有り得ないのだろうか。そんなことを考えているとき、僕はいつもあの巢を思い出すのである。

空間の大きさと心地良さは比例しないと僕は思う。欠如を実感し、それを補うため新しい視点というものが生まれるのであれば、たとえどんなに狭いところだろうがそこで楽しむことができる。人間は本来それができる生物なのではないか。

これから必要なのは、広い空間、巨大な建築ではなく、広く、壮大に感じることできる感覚と、そして小さな建築である。昔、自分がもしも虫ぐらいの大きさだったら、世界がどんなふうに見えるのだろうかいつも僕は空想していた。そう、あの感覚である。そして、それは子供だけでなく、実は全ての人が持っている感覚なのではないかと僕は思う。そんなことを頭に思い浮かべながら僕は東京を歩き、建物を作るという方法ではなく、欠如を栄養分にして新しく生まれた空間を探し続けた。すると、隙間の無いコンクリートジャングルであると思っていた街の中で、一坪にも満たないような小さな場所に、ひっそりと、しかし確実に存在していたのである。

僕はそんな空間を、

「一坪遺産」

と名付けた。

それは、ピラミッドのように長い時間を経ても無くならないような頑丈なものでもなく、

存在していても気づかずに通り過ぎてしまうような、見えにくいものである。しかも、この本に登場するものは見た目には屋根も壁もない、とても空間とは言えないようなものもある。しかし、そういうところですらも、自分の巢のように感じることができなのが人間の面白さだ。考え方ひとつで、世界を無限大に感じることができるのである。

目に見えない空間を視点を変えるだけで体感的に作り出すことができる、太古から続くこの人間の根源的な能力こそ、「一坪遺産」とも言える。

一見、ただの子供の遊びのようにしか見えなくても、空間を作り出そうとしている創造的な作業だと多くの人が感じることもできたならば、いつの日か、何も建てずに、作らずに、持たずに、暮らしていけるようになるだろう。それは僕にとっては決して夢物語ではない。なぜなら、そのほうが現在まで続けられている方法よりも、人間の頭と体だけを使うのだから、手間もお金もかからず、そして限界というものがないからだ。目の前にある有限の空間だけをただ体験するのではなく、人間はそれを各々の思考で捉えることでどんなものにも変化させることができるのだ。

どんなに超高層ビルを作り上げたとしても、それ以上の高さから見ることのできる想像力を私たちは持っているのではないか。

僕には机が家に見えた。その体験がもとで、僕は小学生の頃に建築家という職業があることを知り、将来の夢として思い描くようになった。けれど僕が目指していたのは、一番始めから「建てないで、捉え直す」という方法であつたのだ。それは当然のことながら既存の建築家の仕事とは全く逆のやり方であつた。作らなくてもいい、というのは建築の仕事では有り得ないからだ。仕事として成立しない。作らなくては話にならないのだ。そんなわけでもちろん僕は路頭に迷うことになって、今は絵を描いて展覧会をやったり、本を書いたりしている。それでもいつも、机の家から与えられた直観が頭から離れない。机が家にもなることを見つけた瞬間、見慣れた風景が一変したのだ。それが一体何なのかは全く理解できないままであつたが、ものを作ったりする創作活動よりも自分が興味を抱いていることだけは分かつていた。新しい何かを作るのではなく、やはり僕がやりたいのは新しい視点を見つけることなのだ。日に日に考えるようになった。

何も建てずに、空間が目の前に広がっていることを体感させる。もうこれ以上建物なんか作る必要はない。今、必要なのは頭の中にでっかい都市を作り上げることだ。

それがこの本で僕が言いたいことである。

さあ、それでは話を始めていこう。

* 目次

はじめに——頭の中の無限大

1

1 仮想野球場——二人で野球をするための分身術

11

2 隅田川の0円ハウス——人体の延長線上の家

21

3 宇宙の缶詰

31

4 隙間芸術——中野のパークキングガーデン

39

5 東京駅のエアポケット——パラソルの下の靴磨き屋

57

6 現代の楽市楽座

75

7 歌舞伎町のオートクチュール宝くじ売り場

89

8 世田谷のミニチュア天国

101

9 芸術的豆本作家

125

10 高架下の画家仙人

143

11 立体読書

159

12 見えなくても、ある。

175

あとがき

193

1 仮想野球場——二人で野球をするための分身術

小学生の頃はよく野球をしていた。暗くなるまで広いグラウンドで練習をやったりしていたので、それだけで十分すぎるほど遊んでいたが、休みの日に家にいる時もやはりまた野球をやろうと思いついてしまうのであった。

しかし、僕が当時住んでいた家はよくある三階建てのアパートで、野球をする場所なんてない。自転車で少し行けば公園はあるが、なにせいきなり思いついてしまうので、かけてくれるメンバーは簡単には集まらない。それでも衝動は抑えきれず、僕よりも野球狂であった一つ年下の弟とどうにか二人で熱戦を繰り広げようと試みることにした。場所は、やはりお手軽にできるところがいい、ということで家の前にある駐車場が野球場として

選ばれた。

小学生は、野球をしたいからといって簡単に自分の家に野球場を作ることはいできない。どうか妄想するしか道は無いのである。しかし、その制約のおかげで画期的な仮想野球場が突如として目の前に現れてきたのだ。

駐車場には両側に車が四、五台ずつ並んでいるので野球ができる空間はほんの少ししか無い。こんな狭い所では、普段使っている金属バットと軟式ボールは使えない。ということで、プラスチック製のバットとゴムボールを使うことにした。これだったらたとえ当たったとしても車が凹んだり窓ガラスが割れる心配は無い。これで場所と道具は揃った。この仮想野球は経費削減、利用空間削減の省エネ遊びなのである。さらに人員まで削減してしまっているのだが。

二人でやるわけだから、当然一方はバッター、そしてもう一方がピッチャーとなる。しかし、ピッチャーが投げた球を百発百中バッターが打つわけは無いので、つまりボールを受け取る女房役のキャッチャーが必要となってくる。そうしないと、バッターが見逃した球は遠く後ろの方まで転がっていつてしまうわけだ。そこで道端にある壁を有効活用させることを思いついた。

15頁の図のように、アパートと駐車場は細い道に面している。その通りを挟んで反対側は大家さんの邸宅で、その大きな家を囲むために長い塀が続いていたのである。そこで、この白い塀をキャッチャーとして入団させることにしたのだ。これでたとえボールを見逃したとしても、まっすぐ投げた球は壁に当たり、反射してピッチャーのところへ自動的に戻っていくようになった。

では、ピッチャーの後ろを守る残り七人の野手たちはどうするか。アパートと大家の家の壁との間にある駐車場はとにかく狭いので七人が入る隙間は無く、バッターが打った球はすぐに三階建てアパートの窓のある壁に当たってしまうのである。どうしようかなとアパートの壁を眺めていると、一つアイデアが浮かんで来た。

アパートの一階、二階、三階に、それぞれ均等の高さに窓がついている。壁が三等分さ
れているように見えるのである。一階部分に球が当たると、一塁打（ヒット）、二階部分だと二塁打（ツーベース）、三階部分は三塁打（スリーベース）というふうに考えると、どうだろうか。重力を無視して、アパートの壁を人工芝の生えたフィールドと捉えてみると、駐車場の狭さは関係無くなってくるのではないか。

では、ホームランはどうか。やはり有り得ないところへ飛んで行ってしまいうぐらいでな

いとホームランにはしたくないので、ここは思い切って屋上まで飛んだらホームランという設定にしてみた。さらに壁に当たらずに隣の家に飛んで行ったら、ファールとする。これで少しずつ野球の形に見えてきた。

とりあえず実験的に野球を始めてみる。プレイボール。

ピッチャー役の弟がボールを投げる。そして、僕が打つ。ボールはボテボテのゴロとなり、駐車場の上を転がっていく。それを弟が捕る。

「これ、どうする」

「アウトでしょ」

「でも今のは足が速ければセーフかもしれない」

と打ったこっちは納得がいかない。

しかし、一塁ベースを駆け抜けるような余裕のある空間はここには無い。ピッチャー役が投げ終わった瞬間から内野手へと変換し、打ち返された球をアパートの壁に当たる前に無事捕ることができたら全てアウトということにした。

これで一瞬にして、ファースト、セカンド、ショート、サードの四人の野手を生み出すことができた。あと、三人。外野手だ。